

【講演記録／愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立 30 周年記念講演会「愛知大学と東亜同文書院大学編纂中国語教科書『華語萃編』初集】

愛知大学の中国語教学と『華語萃編』初集

愛知大学名誉教授 今泉 潤太郎

(2023 年 7 月 29 日、愛知大学豊橋キャンパス大学記念館ガーデンサロン)

はじめに

こんにちは。近頃は声がだんだん出なくなりまして、歯もガタガタしてきてお聞き苦しいところがありましたらすみません。中国語の発音も駄目になりまして、今日は中国語をしゃべるのもできるだけやめようと思っています。

今日は「愛知大学の中国語教学と『華語萃編』初集」ということを話すのですが、実は同じような題で 10 年ぐらい前に話したことがあります¹。藤田さん（藤田佳久愛知大学名誉教授）がここの長で、ちょうど科研費を取ってオープン・リサーチ・センターのプロジェクトをしていた頃です。その時の 2007 年 3 月のレジュメを見返して見ると今日話そうということは大体話しているの、くり返しになるところもあるやと思います。

『華語萃編』初集は東亜同文書院（1901～45）で作られたもので愛知大学（1946～）でも使いました。書名の「華語」というのはいわゆる中国語のことです。私はこの「華語」という表記が好きです。今は「華」というと台湾の方で、中国が「漢」のことだとなります。中国の大陸の方では「漢語」といっていて、台湾では「華語」といっているからでし

よう。しかし、もちろん私のいう「華語」は台湾のこととは関係なく、ただ中国の言葉ということです。そして「萃編」というのは、そこら辺で話されている中国語を集めてまとめましたということです。「初集」は最初のものということ。『華語萃編』は四集まであり、1 年生用の始めて習う人のためのものが「初集」ということです。

この教科書ができた頃の「華語」すなわち中国語に対する認識が今とは違うのではないだろうかと思うのです。

私は今年で 91 歳になります。私自身は生まれた当時のことは覚えていませんが、ともかく昭和の初期、西暦なら 1932 年です。今年が 2023 年ですから、100 年ほど前の話になってしまいます。十年一昔といいますから、ほんとうに大昔のことです。ですから、そんな昔の状況は現在とはおよそ違っていたと思うのです。

この教科書は、今そういうことも踏まえて読まなければならないでしょう。18 歳、19 歳の東亜同文書院の新生生たちが初めて日本を出て中国へ行って中国語を学ぶというのは、今の愛大生が中国留学することとは全く違うのではないかと。当時の記録や

¹ 今泉潤太郎「『華語萃編』から見た同文書院の中国語教学」『東亜同文書院大学記念センター・オー

ブン・リサーチ・センター年報』(1)、2007 年 3 月、7～23 頁。

写真でもいいですし、小説や映画、テレビでもいいでしょうが参考にするのです。もちろん、面白おかしく書いてあつたりしますから、それらを全てそのまま信用することはできませんが、例えば、当時の日本人や中国人はどのような服装だったのかとか、友人関係や家族関係などの様子、さらに中国、上海はどんなところだったのか、そういうことも手がかりにしてよく考えながら、この教科書を読んでいかないと本当の良さはわからないと思います。

東亜同文書院の中国語教育

東亜同文書院というのは日本人が作った日本人のための学校です。当時の日本は国際的にどんな国だったのかといえ、今の有り様と大きく違う。日本は国際的に高い地位にいたわけではありません。明治維新以降、日清戦争や日露戦争はなんとか勝ってきましたが、もし負けていれば全てご破算というのが実情でした。

その頃の中国関係の学校に日清貿易研究所(1890~93)というのがあります。これは東亜同文書院の前身に位置づけられるもので、名前の通り清国に関する商業を学び実践する団体でした。彼らは中国と交易をしようと思っっているわけですが、中国というのは広く大きい。当時は清国すなわち大清帝国です。日本も大日本帝国と一時期いたりしましたが、長い歴史から見れば中国大陸の東端の海にあった小国、すなわち大和や倭、さかのぼれば卑弥呼がいた小国にすぎないわけで、それが清と対等に商売し、貿易しようというのです。ところがまった

く歯が立たない。商売の方法、習慣など全く違うわけです。度量衡からして違います。言葉も地方によってまるで違ったりする。それでも商売しようとするれば、まずその手がかりとして中国人と話してコミュニケーションをとらなければなりません。「華語」を使ってしゃべれなきゃいけないわけです。

どんな立派な学問をもっている、例えば高杉晋作のような武士が幕末に上海に行つて筆談でやり取りしていますが、そこで書いたものは漢文、昔の中国の書き言葉でした。教養ある日本人とは、そうした古い中国の言葉を読んだり、書いたりしたわけですが、同時代の中国の人々が話している言葉、華語ができる日本人というのは長崎の唐通事のようなほんのわずかしかなかったのです。

また、わざわざ日本に来て商売する中国人というのは、本国の社会で大富豪だとか大商人として重きをなしている人たちではけっしてない。日本へ出稼ぎに来て一山当ててやろうというような者がほとんどでしょう。大きな規模の貿易をしようとするれば、清国へ行って現地のきちんとした大商人とやり合わなければならぬわけです。そのために必死になって中国人と意思疎通して、自分の要求を通して商売しつつお互い利益を得ようとの考えで作られたのが日清貿易研究所です。

日清貿易研究所自体は短期間で閉鎖されてしまいましたが、その関係者や卒業生たちによって作られたのが東亜同文書院でした。

日清貿易研究所を作ったのは荒尾精²で

² 荒尾精(1959~96)尾張国出身。軍人、教育者。陸軍士官学校卒(旧第5期)。歩兵13連隊付、参謀

本部付、清国派遣。その後、上海に日清貿易研究所を設立し通商に当たる人材養成をすすめた。大尉。

す。東亜同文書院は根津³が作ったのですが、実は二人とも明治時代の陸軍軍人です。帝国大学や早稲田、慶応、同志社というような近代的な学校による高等教育制度がきちんとできあがる前の時代の人です。整った高等学校がほとんどない時代にあつて、軍隊の中で士官学校では近代的な教育が行われていましたから、その頃の士官というのは当時の社会のエリートといえます。

そこで学んだ荒尾と根津は当時の世界情勢を分析して経済力、つまり商業が重要だと考えました。そして作ったのが日清貿易研究所です。

さらに根津は、経済はもちろん重要だけれども、金勘定だけではなく人作り、きちんとした人物であらねばならない、そうした人物を育てるための教育こそが最も重要だと考え、そして作ったのが東亜同文書院です。

たしかに米英など列強の進出に対抗するためには軍事力が必要ですが、それを支えるにはそれ並みの経済力が要るわけですし、大陸の端っこの小国がいきなり強大国になれるわけもないのですから、隣国の清と共榮していく必要があり、それには他者と協力関係を構築し信用される人を育てなければなりません。ですから、東亜同文書院というのは非常に進んだ考え方に基づいて作られた学校であったといえます。

そこでコミュニケーションを取るのにとっても重要なのが言葉なわけですが、それについても英国ははるか先にいっていました。イギリスの外交官トーマス・ウェードの『語言自邇集』(1867年)という、しっかりとし

た教科書も作られていました。これをお手本にして日本でも華語の教科書が作られはじめ、そうした流れの中でこの『華語萃編』も作られたのです。これらはコミュニケーションのための中国語をどのように教育していくかという実践に重きを置くものです。例えば、『華語萃編』初集の課文第1課は「好(よい)」、「不好(よくない)」、「好不好?」(よいか)から始まっています。いきなり形容詞ですが、文法云々ではなくて中国人が普段しゃべる時に常用しそうな表現から入っていき、そのままおぼえるのです。

ちょっと調べましたら昭和19年(1944)、文部省の通達によって、中等教育では低学年から英語は教えなくてもよい、その代わりに体操と武道、軍事教練をおこなうとの記述をみつけました。翌年4月、豊橋市中柴町(現・豊橋市大国町)にあった豊橋中学校(現・愛知県立時習館高等学校)に入学した私の場合、校庭に対戦車地雷投擲のためと称して蛸壺のような穴を掘ったりしていたので、終戦後に英語の授業が本格的に始まりました。

東亜同文書院から愛知大学へ

東亜同文書院に入ってくるのは、旧制の中学校の4年や5年卒業の男子です。当時は女性のための高等教育はほとんどなかったですから、この学校も男子だけです。慣れない外国で暮らすわけですから非常に身体が丈夫でなければいけませんし、そもそも当時は高等教育の学校へ進学しようとするのはごく一部の者であり、しかもわざわざ中国へ行こうと考えるのはもっと少ない。

³ 根津一(1860～1927)甲斐国出身。軍人、教育者。陸軍士官学校卒(旧4期)、広島鎮台付、陸軍大学

校中退、参謀本部付。荒尾精の日清貿易研究所に参加。後に東亜同文書院院長を務める。少佐。

それでも入学してくるのですから、この学校で何をやるのか、何のために中国語をやらなきゃいかんのかということについて、きちんと考えて自覚した者が入学してきたのでしょう。

東亜同文書院の卒業生たちの感想文などからは、根津院長が考えた平和な状態で商売をして日中双方がウィンウィンとなることを目指して彼らが働いた様子がうかがえます。しかし、戦争がだんだん激しくなります。軍よりもお金、お金よりも教育、そして徳性を持つ人格形成を理念として東亜同文書院は作られたのに、日本は最初の段階に戻ってしまう。まことに志を得ない状況ではあります。その中でも書院生はきちんと中国語を学んできたと思います。

愛大は同文書院の尻尾を継いでおります。尻尾というのはこういうことです。つまり、敗戦で母校をなくしてしまい引揚げてきた、東亜同文書院大学などの学生の学業を成就させなきゃいかん、彼らを卒業させるべく愛知大学は作られたということです。

東亜同文書院大学の最後の学長だった本間喜一⁴先生は、在学生については学業を成就させること、卒業生については卒業を証明すること、校友活動を保証することなどが廃校となった大学の責任者としての義務と責任と言われた。さらに大学の学術研究の業績を高めて世に知らしめなければならぬと考えられた。愛知大学と『中日大辞典』はこうした本間先生のお考えのもとで作られたものです。

同文書院の延長である愛大の中国語教育

では自ずと『華語萃編』を教科書として使ったのです。

旧制愛知大学の『華語萃編』による中国語教育

愛知大学は 1946 年に財団法人旧制大学として創立しました。それが 1949 年になって学校法人新制大学に代わります。この旧制と新制とは性格がかなり違うものだと思います。私は昭和 26 年 (1951) に愛知大学に入学しましたので新制の第 3 期生です。旧制時期というのは愛知大学を名乗った東亜同文書院大学だったと思います。そういうふうに学生も先生も皆思っていたと思いますし、豊橋市民も世間もそう思っていたのかもしれませんが。旧制大学創設期の愛知大学の学生は軍隊から帰ってきて、復員と言いましたが、ぼろの軍服を着て、冬になっても汚れた夏服を着ていたりして、まるで乞食のような風体でした。食糧難のために大学の校庭で芋などを作っていました。上海にあった東亜同文書院大学の一行が敗戦のために着の身着のまま豊橋に避難してきたような有様だったのです。東亜同文書院では外国語といえばまず中国語でしたから、愛知大学と名は変わっても当然基本は中国語です。

使う教科書はもちろん東亜同文書院の中国語教科書『華語萃編』です。石田さんの説明⁵にもありましたが『華語萃編』初集は何度も変更されています。刷る度に手を入れるというのは東亜同文書院ではよく行われていました。それは愛知大学が東亜同文書

⁴ 本間喜一 (1891~1987) 法学者、教育者。山形県出身。東京帝国大学卒。検事、判事、東京商科大学教授、東亜同文書院大学学長、愛知大学名誉学長、

一橋大学名誉教授。最高裁判所事務総長も務めた。

⁵ 石田卓生「愛知大学版『華語萃編』初集について」『同文書院記念報』(32)、2023 年 3 月。

院大学から引き継いで編纂した『中日大辞典』でも同じです。初版の活版印刷の時は象嵌といって訂正する箇所を削って新しい活字をはめこみ直しました。初版は 8 刷りしましたが、小さい訂正は毎回やっています。普通は教科書でも図書でもこういうことはあまりしないのです。訂正しなければ印刷代と紙代、製本代だけで済み、改版の費用はなくてすみます。版を変えらるとなると相当費用が増してくる。でも、値段に直に反映できません。ですから、普通はそういうことはやらないのです。『華語萃編』も『中日大辞典』と同じで、刷る度に小さい訂正をやっている。もちろん版を改めるような場合は別ですが少々の変更では特に記録したりしません。手間は掛かっても常に最善のものを出すのは当たり前だという気風があったのだと思います。

東亜同文書院には華語研究会というのがあって、真島次郎⁶先生をはじめ鈴木擇郎⁷先生など代々『華語萃編』他の教科書を作りました。愛知大学もこれを引き継いだのです。

愛知大学の中国語教育の変化

1949 年は愛知大学が新制大学になった年ですが、これで上海から来た東亜同文書院大学が完全に豊橋の愛知大学に代わったと思います。中華人民共和国ができた年でもあるというのも面白いですね。

ともかく、新中国が成立すると、それまで戦争などで抑えられていた中国人による中国語研究がぱっと花を咲かせます。それを

反映した代表例が漢字の簡略化でした。1950 年代前半に議論が本格して「漢字簡化方案草案」(1955 年)が出て、文革中の「第二次漢字簡化方案(草案)」(1977 年)では共通の発音であれば同一の略字でいいと極端になり、これではだめだということで「簡化字総表」(1986 年)で落ち着きました。ですから、現在使われております漢字の基本になるものは 1950 年代前半位にできたものです。

そういう中国語の変化に応じて『華語萃編』初集も変わったわけです。例えば、「底」、「的」と書き分けていたのを「的」に統一し、「地」、「得」とともに発音の表記も [de] にしましょう、と。声に出せばどれも同じだからというわけです。それを反映し『華語萃編』初集も改めたわけです。

中国の「方案」ですが、これはたんなる案じゃありません。ほぼ決定です。確定された方針に基づく案です。ただ、いきなり決定に従えというのではなくて、実施をして広く皆さんから意見を募りますよという形式なのです。不確実な案ではない、「方案」という名の決定です。中国では言葉について文字、発音、文法、標準語と方言、少数民族語などの方案が次々に出されて 1950 年代にほぼ現在の中国語のスタイルが確定したのです。

愛知大学では 1952 年度の第 6 回卒業式で旧制大学最後の学生が卒業し、同時に新制第 1 期生が卒業しました。これまで維持されてきた同文書院の華語教育も終結したの

⁶ 真島次郎(1885~1925)中国語学者。佐賀県出身。東亜同文書院第 2 期生。母校の教員として活躍。

⁷ 鈴木擇郎(1898~1981)中国語学者。栃木県出身。東亜同文書院第 15 期生。戦前は江商(現・兼松)

勤務、東亜同文書院教授、同大予科教授、戦後は愛知大学教授、中日大辞典編纂委員長、同主任。愛知大学名誉教授。勲三等瑞宝章。

だと思えます。

東亜同文書院生というのは西暦の数字と入学年が同じです。鈴木先生は東亜同文書院の第 15 期生ですから 1915 年入学です。

東亜同文書院の華語教員は大体 10 期未満で新しいメンバーを入れています。原則的に全員書院卒でしたから、先ほど申し上げたような書院の理念に基づいた中国語教育をやると自覚した人たちです。書院卒の教員ばかりなので大変に結束力が強い。しかし、旧制愛知大学を卒業した書院生から母校愛知大学の華語教員となった人は皆無でした。残念ですが私の考える書院の伝統を継ぐ中国語教育は不可能となりました。担当教員間の密接な連携を前提に編集された『華語萃編』初集も出番がなくなりました。

私の中国語学習

私は 1951 年入学ですが、私が受けたのは同文書院もどきの教育です。そもそも中国、上海ではないですし、同じ理想などを抱いているのでもない。私がこの学校に入ったのは、ただ、お金がなくて東京や関西の大学に行けない家庭状況で、たまたま豊橋に愛知大学ができてくれたからです。そしてそこに中国語があったからやったのです。書院生と比べたら全く低レベルで、目的意識など特にはないのです。

まだ旧制大学在籍中の書院生がいくらかいた頃のことですから、「もどき」といえども、ここは上海だと思って「念書」をやっていました。私は、かろうじてこの時期に入学しました。

私は大学のすぐ近くにある小池神社のあたりに家がありましたので、そこから歩い

て通学し、学生寮に入っていた書院生の先輩に「念書」してもらいました。「念書」というのは声をあげて本を読むことです。入学して夏休み前までやります。何をやるかといえば、この『華語萃編』初集 1 冊だけです。

中国語の試験は「聴写」、つまり「聞いて書く」をします。課文そのままではないですが、先生が言う中国語を聞き取って書くのですね。また、中国語を聞いて日本語に訳す華文和訳もある。「小考」と称して毎回やりました。

授業の点呼、「点名」も中国語の発音でやりました。そうしますと、クラスに 20 人おりますと 20 通りの名字がありますね。名字は大体が 2 文字ですから、20×2 で 40 字です。40 字ということは 40 の発音ですよ。中国語は一つ概念を一つの音、一つの字で表すのが基本ですから、40 字の発音ということは 40 の意味、概念と考えてもいいです。名前を中国語で聞き話すというのはいきなり 40 個の中国語を頭に入れてしまうということになります。漢字の発音を片端から覚えることは良い勉強法でした。

『華語萃編』初集の冒頭部分には、猫とか鶏とか並んでいて、これを発音しながら覚えます。「māo」(マオ) って言うのは、音であると同時に猫という一つの意味を表します。さっき言ったことですね。最初は 1 字の単語、次に 2 字の連語、4 字の成語とやっていきます。これもきちっとしたトレーニングだと思います。先ほど挙げた課文第 1 課の「好」ならば、形容詞「よい」という一つ単語ではなくて、「好 hǎo」という完全な一つの文なんです。一音節、一字、一語で一文になっているわけです。発音と意味と文

字、これらが一体化されているのが中国語の基本です。もちろん学習が進めば、そうじゃないものも段々出てきますが、原理はそうです。

後に愛知大学は『華語萃編』初集を止めて『中文会話教科書』という教科書を作るのですが、これは『華語萃編』と比べると未熟だったと思います。教科書作りは本当に難しいのです。私は教員としてこれも使ってたと思いますが力不足で学生も学びにくかったと思いますし、申し訳なかった。『中文会話教科書』は内山雅夫⁸先生（東亜同文書院第34期生）と張祿澤⁹先生が中心になって愛知大学華語研究会が作ったものです。1964年に大安から出した『中文会話教科書』は活版印刷です。これ以前に謄写版の試用本を作りました。内山先生が渾身の情熱と努力で作成しましたが、やはり『華語萃編』初集に比べ中途半端でした。使用期間が短いため完成度不足でしたし、教える私の力不足もあったと思います。鈴木先生は旧制の学生が卒業して完全に同文書院以来の中国語教育がなくなったことで、新教科書作りの情熱が途切れてしまったんじゃないかと感じました。

その代わりというか、鈴木先生は1955年から始まった『中日大辞典』の編纂の方に集中されていったと思います。

東亜同文書院大学から受け継いだ愛知大学の中国語辞典編纂事業

『中日大辞典』の編纂は、鈴木先生が東亜同文書院時代の1931年に華日辞典編纂を提起し、当局の承認を得て始めることになったのが、そもそもの始まりです。東亜同文書院の華語教員は日本人の教授、助教授、講師と中国人の講師が五分五分ぐらいの総勢20名ほどで構成されていました。それが敗戦で辞典の原稿カードなど全て中華民国側に接收されてしまった。その後、紆余曲折を経て本間先生のご尽力で中華人民共和国になってから原稿カードが戻って来て愛知大学の『中日大辞典』に繋がったのです。

この辞典編纂というのは、先ほど言った本間先生のお考えの一つ、学校の学術研究業績を明らかにすることですね。本間先生は鈴木先生の背中を押して愛知大学で同文書院の華日辞典を完成させようとしたのです。本間先生は愛知大学を作った時から辞典のことを頭の隅に置いておられたようです。1949年の中華人民共和国成立から間もなく東京で結成された民間の団体・日本中国友好協会の発起人として、内山完造¹⁰氏や平野義太郎¹¹氏などと協力し活躍されています。ここを窓口の本間先生は辞典の原稿カード返還の行動を始めました。相手は郭沫若¹²先生です。郭さんは有名な文学者で中華民国でも活躍され、中華人民共和国でも

⁸ 内山雅夫(1916～1975)熊本県出身。中国語学者。東亜同文書院第34期生。伊藤忠勤務、中支派遣軍囑託、上海日本商業学校教諭、上海日本中学校講師、東亜同文書院大学予科教授、愛知大学教授。張祿澤共著『中国語教室会話』江南書院、1957年。

⁹ 張祿澤(1920～1996)北京出身。中国大学卒。上海工部局女子中学教員、国風社勤務、台北成功中学教員、愛知大学講師、ドイツ・ボーフム大学講師。『中国服装の作り方』春秋学院、1964年。

¹⁰ 内山完造(1885～1959)岡山県出身。戦前、上海

で内山書店を経営し魯迅など中国人と交流。戦後は日中親善に尽力した。

¹¹ 平野義太郎(1897～1980)法学者。東京出身。東京帝国大学卒、同助教授。戦後、日中友好協会副会長、中国研究所所長、現代中国学会会長。

¹² 郭沫若(1892～1978)文学者、歴史家、政治家。四川省出身。文学結社創造社を結成し文学者として活躍。後に歴史研究にも従事した。戦後は中国科学院院長などを務め、文化教育方面を中心に政治家としても活躍した。

政治家として活躍されていました。そういう方に手紙を送ったのです。

辞典の原稿カードについては、中国側に接收される際に鄭振鐸¹³氏が大学に接收に来ました。書誌学、中国文学の権威で専門家として東亜同文書院大学所蔵の書籍を調査、接收に来たわけです。彼の日記には、東亜同文書院大学に行ってみたがとくに見るべきものはなし、と簡単に記してあるだけです。元来、鄭さんは国語辞典編纂に関心を持ち、中華人民共和国になってからは文化部（文部省）の高官になっていますから、華日辞典の原稿カードに関心はあったと思うんです。

東亜同文書院大学が中華民国に接收された際には、不動産、黄金、蔵書から薪が何十束とかまで細かく調べた財産目録が作成されているのですが、その中に十余万枚あった華日辞典の原稿カードのことは何も書いてありません。ですから、記録上では辞典の原稿カードはここで行方不明になりました。

しかし、この時立ち会った鈴木先生は、自分と同業の学者である鄭さんが接收に来たので、その場でじかに、これは日本人のための華日辞典原稿カードで、できれば将来自分たちの手で完成させたいということを口頭で伝えたそうです。

そうしたことも本間先生は知っていて、これを返してもらおう、東亜同文書院大学の遺産として完成させなければいかんとお考えになったのですね。本間先生は法学者でしたから、法的な見地から辞典原稿カードの返還請求が可能だと考えておられたのかもしれませんが。東亜同文書院大学は国立ではなく私立の経営でしたから、民間の財

産である辞典のカードが接收され、著作権者の鈴木先生が意思表示されたというのは、何かしら突っ込む点があったのかもしれませんが。私はそういう法律のことは専門ではないのでわかりませんが、是非とも分かる人に研究してもらいたいです。また、接收財産目録に辞典原稿カードが入っていなかったことは返還に繋がる何かがあったのかもしれませんが。

辞典の編纂については、本間先生が鈴木先生にとにかくやろうじゃないかと説得されたそうです。学長室の隣は鈴木先生の研究室でした。本間先生は鈴木先生を非常に信頼されておられました。

実は鈴木先生は内心では躊躇されておられた。あの原稿カードが戻ってきて、編纂の仕事をするようになったら大変なことになる。同じ理念を抱いて学校一丸、家族のような状態でやっていた同文書院華語研究会なら時間外労働も平気でしょうが、全く別の学校となった新制愛知大学でそんなことができるのかということです。私以降、母校の中国語教員となったものは誰もいません。石田さんが聞きとりされた亀山さんは鈴木先生から学校に残らないかと声を掛けられたそうです¹⁴。とても優秀だったからです。しかし、私よりも15期も下ですから、残ったとしても、やはり東亜同文書院大学の中国語をそのまま伝えていくことができる状況ではなかったと思います。

そうした中で同文書院の辞典原稿カードが戻ってきて編纂が始まり、鈴木先生はそれに専念されたわけです。

今、愛知大学には国際問題研究所という

¹³ 鄭振鐸 (1898～1958) 文学者。浙江省出身。文学結社文学研究会を結成し機関誌『小説月報』編集。

¹⁴ 石田卓生「亀山琢道さんに聞く」『同文書院記念報』(31)、2023年3月、261～67頁。

ものがありますけど、当初は中国研究所だったのです。愛知大学はもともと上海の東亜同文書院大学がそのまま豊橋に来たものです。東亜同文書院には支那研究部という研究組織がありましたが、その愛大版に当たります。その頃、アメリカは中国共産党を警戒していました。共産党が政権を取って中華人民共和国ができた後には朝鮮戦争で戦うことまでしています。そのような状況で中国共産党と繋がりがあられると思われては大変なわけで、表立っては「中国」の研究所とはいえ、「国際」的な問題を研究する所だと名付けたのです。今の東亜同文書院大学記念センターの建物、昔の本館に国際問題研究所があって看板が掲げられていましたが、看板の裏側には愛知大学中国研究所と書いてありました。もともとの看板をひっくり返していたのです。

東亜同文書院の華日辞典は、支那研究部の中の華語研究会で編纂していましたから、愛知大学でも最初は中国研究所の中に辞典編纂部門を入れるという案でした。それが「中国」はダメだということで国際問題研究所となり、結局辞典は別に華日辞典編纂処を作ってやることになりました。

『華語萃編』と『中日大辞典』

『中日大辞典』の初版は鈴木先生が執筆され、さらに内山先生が実務的な編修を進めて1968年に完成しました。

辞典はふつう巻頭に、この辞典はこのよ

うな意図で編纂されていますというようなことが書かれます。倉石武四郎先生の『岩波中国語辞典』を見ると、最初に中国語総論とでもいいでしょうか、音韻や文法に関する文章があります。『中日大辞典』はそういう方式をとってない。

東亜同文書院の中国語教育には文法がなかった、『華語萃編』を覚えるだけのものだと批判的に言う人もいるのですが、それは全くの見間違いだと私は思っています。『華語萃編』は中国人と真っ当に商売できる日本人のための中国語教科書なのです。これは『中日大辞典』も同じであって、日本人の学生が中国語を学ぶための辞書です。そういったことは個々の項目を見ていただければわかりますが文の解釈や説明がきちんとされています。ひろく橋本萬太郎¹⁵先生や太田辰夫¹⁶先生、また書院出身の魚返善雄¹⁷先生などから高い評価を受けています。

『華語萃編』も『中日大辞典』も文字の世界だけの中国語ではなくて、生きた中国語を対象としたのです。中華人民共和国になって中国は一変したといいますが、たしかに政治は激変しましたが本当の生活の実態はそう変わらないです。文化大革命だって影響はありましたが変わらないこともたくさんあるわけです。そういった中国の人々の日常生活をベースにして中国語を学ぶ、そのための教科書であり、辞典であるという態度が伝わらぬかれています。

では、以上で終わりにしたいと思います。

¹⁵ 橋本萬太郎 (1932~87) 言語学者、中国語学者。群馬県出身。東京大学卒、オハイオ州立大学で博士号取得。ハワイ大学助教授、大阪市立大学助教授、プリンストン大学准教授、東京外国語大学教授。
¹⁶ 太田辰夫 (1916~99) 中国語学者、中国文学者。東京出身。東京外国語学校卒。神戸市立外国語大学

名誉教授、京都産業大学教授。

¹⁷ 魚返善雄 (1910~66) 中国語学者。大分県出身。東亜同文書院中退 (第26期生)。日華学会理事、東京高等師範学校教授、東京帝国大学 (後・東京大学) 非常勤講師。

東亜同文書院（大学）・愛知大学中国語教育関係年表

主な中国語関係教員の在籍期間	教材	時代	東亜同文書院（大学）・愛知大学の事項	中国の事項
東亜同文書院卒業生		1901	東亜同文書院（大学）	清
	跬華歩語	1905	5 東亜同文書院（3年制）。高昌廟桂墅里校舎（～1913）	
		1906		
		1907	第1回支那調査旅行（大調査旅行）	
	北京官話	1910		10 辛亥革命
		1911		中華民國
		1912	7 高昌廟桂墅里校舎焼失（第二革命戦禍）	7 第二革命
		1913	10 赫司克而路仮校舎（～1917）	1 二十一条要求 12 袁世凱帝政運動
		1915		
		1916	徐家匯虹橋路校舎（～1937）	注音字母（注音符号）公布 5 五四運動
		1917		
		1918	専門学校令（4年制）	7 広州国民政府 2 北伐 4 南京国民政府 8 第一次国共内戦（～1937） 国語統一籌備委員会 6 張作霖爆殺。12 東三省易幟
		1919		
		1920		
		1922	華語研究室設置。『華語月刊』創刊	12 福共戦 9 九一八事変（満洲事変）。ラテン化新文字
		1925		
		1926		
		1927		
		1928		
		1929	4 魯迅特別授業 華日辞典編纂開始 辞典資料カード焼失 9 学生通訳従軍	7 七七事変（盧溝橋事件）
		1930		
		1931		
		1933		
		1936		
		1937	11 徐家匯虹橋路校舎焼失（日中戦争戦禍） 4 海格路臨時校舎（～1945） 12 大学令（豫科2年・学部3年制）、東亜同文書院大学。	
		1938		
		1939		
		1941		
		1942		
		1943	10 学徒出陣	6 第二次国共内戦（～1949）
		1944	2 第3代学長本間喜一 7 呉羽分校	
		1945	8 終戦。復学式 9 海格路臨時校舎接収。辞典資料カード接収 11 呉羽分校解散 12 第1陣帰国 3 第2陣帰国 5 新大学設立会議 7 豊橋に大学設立事務室	
	華語萃編	1946		
		1947	愛知大学	
		1948	11 財団法人愛知大学（旧制大学：豫科3年・学部3年制） 12 豫科転入学試験 1 第1回入学式 3 第1回卒業式 6 国際問題研究所	
		1949	4 学校法人愛知大学（新制大学）	中華人民共和国
		1950	4 文学部文学科中国文学専攻 6 第2代学長本間喜一（～1955.11）。東亜同文書院華日辞典資料カード返還運動（1954.10） 5 愛大事件 3 第6回卒業式（旧制・新制合同） 10 東亜同文書院大学華日辞典資料カード返還 4 華日辞典編纂続	10 中華人民共和国成立 10 中国人民志願軍朝鮮戦争参戦
		1952		2 中国文字改革研究委員会 10 『新華字典』初版 12 中国文字改革委員会 12 『第一批異体字整理表』
		1953		1 『漢字簡化方案』（一簡字） 6 『新華字典』新版（簡化字）。反右派闘争 10 『普通話異読詞書表初稿』 2 『漢語拼音方案』。 5 大躍進政策
		1954		2 『新華字典』新版（拼音） 10 『現代漢語詞典』（試印）
		1955		
		1956		
		1957		5 『簡化字総表』『印刷通用漢字形表』 5 文化大革命（～1976）
		1958		9 林彪事件 10 国連代表権 9 日中国交正常化
		1959	4 第4代学長本間喜一（～1963.4）	
		1960		
		1961	許広平講演 1 山岳部薬師岳遭難	
		1963		
		1964		
		1966		
		1968	2 『中日大辭典』初版 5 『中日大辭典』中日文化賞受賞	
		1969		
		1970		
		1971		
		1972		
		1973	6 愛知大学学術代表訪中団（鈴木・池上・今泉・中島）、中日大辭典座談会（南開大学・北京大学・復旦大学）	
		1974		
		1975	4 『中日大辭典』編纂再開 第1回学生友好訪中団	9 四人組逮捕
		1976		